

## 広島県産クゲヌマランの染色体

世羅徹哉<sup>1)</sup>・青山幹男<sup>2)</sup>

### Chromosomes of *Cephalanthera longifolia* (L.) Fritsch from Hiroshima Prefecture

Tetsuya Sera<sup>1)</sup> and Mikio Aoyama<sup>2)</sup>

#### Summary

Chromosomes of *Cephalanthera longifolia* from Hiroshima Prefecture were observed, as a result clarified chromosome number of  $2n=32$  and bi-modal karyotype, found to be the same as previous reports.

**Keywords:** Hiroshima Prefecture, Chromosomes, *Cephalanthera longifolia*

#### はじめに

クゲヌマラン *Cephalanthera longifolia* (L.) Fritsch は、1936年に前川文夫博士が *Cephalanthera shizuoi* F. Maek. として記載したラン科キンラン属の多年草である。記載当時から分布域や生育環境が限られた希少な植物種とされていたが（里見 1982）、2000年ころから急速に新しい生育地が知られるようになり（遊川ほか 2003）、現在では北海道から九州までの広い範囲で生育が確認され（遊川 2015）、広島県でも 2011年に本種の自生が発見された（世羅・近藤 2013）。また、種の分類学的な取り扱いについても研究が進み、遊川（2009, 2015）は、クゲヌマランがユーラシア大陸に広く分布する *C. longifolia* (L.) Fritsch と同一種であるとしている。

*C. longifolia* の染色体についてはイギリスからインド、中国に至る様々な地域の材料を用いた研究があり、 $2n=32, 34, 36$  等の染色体数が紹介されている（Rice et al 2015）。一方日本産の材料については、水野（1937）および Miduno（1938）が神奈川県沼産の材料を用いて、*C. shizuoi* の染色体数が  $2n=32$  で、それらが二相的な核型を示すことを報告してい

るが、他の産地の材料については研究例がない。今回著者らは、近年自生が明らかになった広島県の材料を用いて染色体を観察したので報告する。なお、染色体の観察は著者の一人青山が広島大学在職中の 2013 年に行っていたものである。

#### 材料・方法

染色体の観察は若い蕾の体細胞分裂組織で行った。すなわち、採取した小さい蕾を現地で縦方向にできるだけ薄くスライスし、 $4^{\circ}\text{C}$ 、 $0.005\%$  のコルヒチン水溶液に 20 時間浸した。その後、 $0^{\circ}\text{C}$  の酢酸エタノール（ $99\%$  エタノール：氷酢酸 =  $3:1$ ）で 24 時間以上固定したものを、通常のアセトオルセイン押しつぶし法で一時プレパラートを作製して染色体を観察した。染色体の形態の表記は田中（1977）に従った。

#### 結 果

体細胞分裂中期で、染色体数  $2n=32$  を算定した（Table 1, Fig.1, 2）。32 個の染色体は、長さが  $8.0$

\*Contribution from the Hiroshima Botanical Garden No.106

1) 広島市植物公園, 2) 故人

Bulletin of the Hiroshima Botanical Garden No.34:9-11, 2019.